

第一回星野立子新人賞

糸屋和恵

夕顔や姉妹の爪を切りそろへ
起き抜けの水の甘さよ土用波
子供には子供の時間金魚玉
青芒活字を読まぬ日もありぬ
虫干やすぐ巻き戻る軸を解き
少年はこちらを見ずに祭笛
足跡をのこして夜店畳まるる
夜の秋財布のごとくくたびれて
信号のどこまでも青夏終る
はやばやと寝るしたくして蟋蟀
木犀や昼は通らぬ道をゆき
子を寝かすつもりの夢にいなびかり
松手入あるじの顔は知らぬまま
大雨を灯して進み万灯会
月光やどこかの家で電話鳴る
衣被親よりもなほ無口なり
始まりも終りも知らず秋祭
無花果を煮るやひとりと思ひつつ
忘れたる傘思ひ出す良夜かな
菊人形かげれば風の強くなり
駅前のかつて賑はひ昼の月
転びつつ歩きはじむるものこづち
天高しきのふもあすもなきごとく
どこへでも電車で行ける秋の暮
鳥渡る大きな鍋に湯を沸かし

雨やみて引込線の月夜かな
秋深し機械の声に指図され
酔客のちりぢりとなり後の月
捨つるべきものにはあれど冬隣
しののめの海へ雨ふる冬はじめ
石路の花このごろ熱を出しやすく
冬紅葉いつもの犬と通るなり
行列の一人となりぬ木の葉髪
神の留守しづかな沖に舟を出し
蛇穴に入り珈琲の冷めてをり
银杏散る門を閉ざせる遊園地
酉の市ところどころに灯をともし
くらがりを担がれてゆく熊手かな
拭きとれぬ眼鏡のくもり一葉忌
返り花いつも大きな荷を抱へ
古書匂ふ路地のたちまちしぐれけり
都鳥人に会ひたる疲れとも
あたたためし皿を並べて冬ざるる
着ぶくれて言訳うまくなりにつり
寒星や歌ふごとくに子の寝息
やはらかき厚みとなりて日記果つ
お屋敷の跡形もなし竜の玉
セーターのちくりと年を重ねたる
飼はれたる生きものうごく霜夜かな
湯船の湯大きく揺れて年つまる